

思春期のメンタルヘルス

重松正典

(ライフサイクルケアセンターグループ)

最近中学生の起こす事件が続発し、こどもの心のあり方について多くの批評がなされていますが、今回私は問題行動・不適応症状を呈しながらも自己を確立し、自立への道を模索する子供たちとの関わりを通して見えてくる思春期における現状と問題について、少し話をさせていただきます。

思春期においては、身体の著しい成長変化とともに、心理、社会的にも、それまでの親から保護を受ける対象としてのあり方から、大人を批判的な目で見て独自のあり方を模索し、他ならぬ自分自身を確立し、自立への目処を立てるという課題に直面する時期であり、その過程は自己矛盾と不安に満ちていて、まさに思春期は揺れ動く年頃であるといえるのではないのでしょうか。こうした様相は親離れ、子離れが遷延化しつつある現代においても基本的には共通しているように思えます。

この現代社会において家庭の養育機能が低下したといわれるようになって久しくなりますが、本来は家庭や学校教育の中で培われるべきこうした自我同一性の感覚がなかなか獲得しにくい状況がおきているように思えます。このような状況の中で、さまざまな心理的困難を抱えた思春期・青年期の人々が、育ち直しをし、自己を確立して、自立への目処を立てていくことを援助するには、単一の専門領域での理論、技法のみならず、心理、教育、医療、福祉を統合しながら、さらに社会生活との接点を見出していく営みが不可欠であると考えます。心理療法

や医療は、問題を抱えた本人と臨床家や医師との個別的関わりを中心に行われることが多く、その結果、個別的な状況ではかなり状態が改善しても、実際の学校生活や社会での仕事に復帰するとなると、治療場面と現実の生活の段差はかなり大きいということになります。こうしたときに、人間関係の持ち方や技能を個人の能力に応じて焦らずしかも着実に身につけていける、そして所属感・居場所の得られる場が必要であると考え、私どもはライフサイクルケアセンターを設立しました。

ライフサイクルケアセンターには、自閉症、知的障害、不登校、問題行動、神経症レベルから精神病と診断され服薬しながら社会復帰を目指すものまでさまざまな子供たちを対象として統合的援助の実践に関わってきました。この実践は、少しずつ時間をかけ、育て直しという手作りのプロセスを辛抱強く繰り返していくことであり、その中で当面の手立てをうちながら信じて待つ地道な活動といえると思います。

ライフサイクルケアセンターには、病院退院者と通院者の窓口となるケアセンターと、相談機関としてのカウンセリングセンター、職業実習・職場としての技能養成らくだ、そして不登校および学習を希望するものに対しての学力補充と療育を目的としたフリースクール・ソフィア学院があります。これらは、子供たちの成長にそって、また必要性に応じて形づくられてきました。ライフサイクルケアセンターへの入所経路は、中学校、高等学校、病院、教育相談所、

保健所、知人の紹介、その他さまざまです。相談・医療施設を転々として、疲れきった状態で入所してくるのがほとんどのようです。ここ数年に入所してきた子供たちのうち、入所以前に発育・発達上の問題で精神科や教育相談所等を訪れている子は8割を占め、また入所者60名のうち、5割前後の子が中学校時代に不登校とされています。不登校の理由は、対人関係がうまくいかない、いじめ、学業不振、家庭環境(両親の不和、経済的なもの等)、怠学、ずる休み、非行、登校禁止等、さまざまですが、1～2割が長期入院治療を要し登校できなかった子達です。

この時期のこどもにとって、不登校等の状態にある場合の、空白期間を埋める受け皿をどうするか、ということが極めて大きな問題となります。それは、同年代の仲間と過ごす日常というものが、成長、発達、人格形成上で大きな意味を持っているからです。病院を退院したものの、いざ復学しようとしたとき、その子の気持ちの中にあった学校とは違って戸惑ったり、入院や登校拒否等の不登校期間に生じた学習の遅れ、対人関係の持ち方など、大きな課題に直面することになり、その結果、家に閉じこもったり、昼夜逆転、家族以外の人と接する機会も少なくなり、社会的な発達の問題も出てきます。

特に家庭内での人間関係に著しく問題が現れ、家族相互に病理性が認められることもあり、とりわけ、対人関係のうまくいかない子供に対しては、これまでの親子と異なった関係のあり方を模索し、学習する機会を提供できるかどうか大切であると思います。

私どもは、学校・成績・不登校といった、価値観の違いや症状を一応カッコに入れ、一人一人をひとりの人間として「どう生きていくか」と

いう観点でかかわるようにしています。すると、そのこどもが背負ってきた心の荷物の重さがまざまざと見えてきます。彼らは1週間に1回だけくる子もいれば、毎日通ってくる子もいます。カウンセリングセンター、ケアセンター、ソフィア学院を、体調や精神状態にあわせて利用してくる子、きて運動だけする子、バンドに夢中になる子、自動車免許取得に一生懸命になる子、学力補充のカリキュラムにそって学習する子、通信高校のレポート作成にいそしむ子とさまざまです。

しかし、彼らの心は短期には癒されず、いつまでも尾を引いている子供が多く見られます。また、センターに入る前から、中学の教師、同級生が悪口を言っていじめて、この子を駄目にしたと、被害的になる親や、また、いざ入所したものの腹を決めかね、被害的でいつも人を斜めに見て、他人を信じきれず、どことなく非協力的・非協動的で、それでいて主張が目立って疎通がとりにくい子供たち。前の学校をこれほどまでかと非難して入所してきながら、いつのまにか「前の学校では勉強をたくさん教えていたのに、ここはどうしてクラブと運動が多いのですか。」と勉強に強くこだわってしまい、ともにこどものことを考えていこうという足場を築きにくいということもある。こういった子供たちにご両親を交えて面接してみると、不登校時点で精神症状の悪化が見られ、幻聴と現実の区別がつかなくなっている子供も多く見られます。こういった子供には病院を紹介し、ひとまず落ち着いた段階でセンターに通ってもらうこととなります。いずれにせよ、センターにくる子供は重い過去にとらわれており、ある子供は苦い記憶ばかりにとらわれたり、ある子はかたくなに心を閉じ、ある子は強迫的な行動として表してきます。まさに、毎日悲哀の仕事を積み

重ね、疲れ果てていたようです。

こういった子供たちの言葉に虚心に耳を傾けてみると、以下のことがいえるのではないでしょうか。

1. 子供を取り巻く文化的・社会的枠組が、自分の精神的成長や能力、学習ペースに沿ったその子なりの課題を一步一步確実にやり遂げていくことを許さない。その中で、確かなものがないまま流されていく自分への焦りや不満が生まれている。しかしサインを出しても親は他の選択を認めず、一步下がることも許さず、信じて待つこともしない。
2. 成長とともに人間性の評価がなされず、学習上の評価で人間性を決められる。
3. 親や教師は、おとなしく問題がなく枠の中にいる子、親や教師にとって都合のよい子が「よい子」だとされる。
4. 何かあったとき、親や教師は子供を説教し責めるが、どうして子供たちがそうせざるを得ないかを考えてくれない。生き生きと生きることは時として問題とされる。
5. 親も先生も自分自身がその子供の年齢のときは、さまざまに悩み、失敗を繰り返してきたにもかかわらず、そのことを忘れ、あたかも万能の神のように子供に接し、共感的な理解を示してくれない。
6. どう生きていくかを教えてくれない、また、大人の中に見出すべきモデルを見出せない。内実のない空虚さに支配される。
7. 何がよくて何が悪いのか一貫して理解できない。親のしつけや言動が矛盾に満ちて、一貫性がない。

以上のように子供たちが周辺の社会に目をむけたとき、改めて彼らが伝えようとしていることは、彼らを取り巻く人間関係、家庭のあり方、

学校、社会と枠の狭い閉塞状態を常にかけているようです。

ではこの子供たちにどのようにかかわればよいのか、具体的にはどのような要素が必要なのか。これについて、センターの修了者・通所者の事例経過記録を評定した実証的研究がなされた。これによると、家族が良好に変化すること、また、自然な形で周囲の人から受け入れられ、ありのままに社会的活動に参加できることなどが立ち直りにとって重要となっています。

次に主催者からサポート校について話をするようにと行うことでしたので、少し話させていただきます。先に触れましたが、ライフサイクルケアセンターにはソフィア学院があります。ソフィアだけで資格を取り、就職していく子どもたくさんいますので、ソフィアはフリースクールではありますが、一方、ソフィア学院に在籍しながら中学校や高校にも籍を置く子供たちもおり、その場合は中学校や高校とも協力してその子どもと関わっていくこととなります。これは双方が子どものために共同作業をするという意味でサポートとも言えます。ソフィアでは子どもが落ち着いてくると、当面学習を希望する子どもが多いようです。そこで私たちは、中学生においてはソフィアに出席すれば、中学校においても出席とみなすこと、ソフィアに通うための定期に必要な書類は中学校側で用意すること、双方の定期的情報交換とスタッフの交流、行事の相互訪問、本人が希望すればソフィアで中間・期末が受けられ、採点は中学校ですること、また本人が中学校へ復学する希望が出たための常に学校は受入態勢をととのえておくこと、といった約束事を決めた上で受け入れております。もちろん柔軟性をもってですが、この事は全日制高校・定時制高校のお子さんをお預かりしたときも同様です。

しかし通信制高校となりますと、多少関わりが変わってきます。通信制高校においては、先生は生徒に月に2回程度のスクーリングに関わることは出来ないため、毎日通ってくるソフィアの重要性がとわれてきます。精神的フォローとあわせて、学習の補充も学校側から希望されます。たとえば、この部分は高校で教えきれないところなのでソフィアで教えてあげてほしいということや、その子の関わり方について知りたいところを電話で確認するなど、相互に連絡する回数が多くなり、関係が密になります。ソフィアからも、緊張のため受験できないこのために、作文により入学をさせていただくようお願いすることもあります。また協力高校から生徒をソフィアに紹介されることもあります。しかし、他の学校から預かるにしても、私たちは今のソフィアが子供たちにとって落ち着

いてそこから始めることが出来る場であるとすれば、子供の心の成長にとって一番大切で自然な道と考えます。その上で、中学校・高校と協力していくことは大切だと思います。その子にとって学校とソフィアに二人の担任がいるという良さを発揮していくには、子供を生かすという大前提のもとに、大人同士が立場は異なってもひとりの人間としてどれだけの信頼関係を作り共同作業できるかが、試されているように思います。これは、子供たちの自動車教習所への入所や職業実習においても大切なことだと考えています。病気であろうと不登校であろうと可能性を広げるとすれば、関わる大人同士がかたくなにならず、矛盾のない信頼関係を作っていくことが大切ではないか。ゆえに子供たちが自然でありえ、また立ち直り、自立していくことにつながると思います。